

# 2歳自閉症スペクトラム児の母親における 共同注意成立に関わる働きかけの変化（1）

小 野 里 美 帆

## Change of the Joint Attention Between Mother and a 2 Year-old Child with ASD（1）

Miho Onozato

The joint attention formation process was examined for a 2 year-old child with ASD and its mother. In the early-education institution, support for forming joint attention was offered for one year to the mother. As a result, the mother acquired the strategy in which the child maintains attention was sustained. It is argued that various factors in which joint attention is not materialized easily are related to parents and ASD child's joint attention formation.

### 1. 問題と目的

他者とのコミュニケーションのためには、共同注意（Joint Attention）が不可欠である。共同注意とは、他者と1つの事象に注意を向け、共有する行為であり、様々な刺激や情報（視線、ことば、ジェスチャー、事物等）を手がかりに遂行することができる。様々な研究から、共同注意は、2歳までに段階的に獲得されることが指摘されており、言語獲得や「心の理論」の前提であることが、発達心理学、言語学など複数の領域において指摘されている（Tomasello, 1995：大神, 2002：

本多, 2006他)。これらの能力の獲得過程には、身近な大人の関わりが重要であるが、そのメカニズムについては未解明な部分も多い。

自閉症スペクトラム児 (ASD児) は、1歳台という早期から既に共同注意に障害があることが指摘されている (Mundy, 1986)。共同注意が成立しにくいという事実は、他者と事象を共有し、文化を学習する機会が少なくなるという子ども自身の問題のみならず、関わり手側においても、関わりにくさを生じさせる問題である。すなわち、遠藤 (2010) が指摘するように、ASD児は、典型発達児と異なり、養育者の「jointness」(人と人との情動を感応させあうこと) を困難にさせ、後の様々な発達や学習において影響を及ぼすことにつながる。そのため、発達初期のASD児に対する支援において重要なのは、周囲の大人の子どもへの関わりにくさの改善である。Sillerら (2002) は、平均4歳2ヶ月のASD児の共同注意行動に対する親の関わり方は、10年後、16年後の子どものコミュニケーションスキルの向上度と相関することを指摘している。神園 (2002) も、ASD児の発達に及ぼす母親の意識改革の影響が極めて大きいことを指摘しており、廣澤・田中 (2008) は、養育者以外においても、ASD児の関わり手側の変容がコミュニケーション成立には不可欠であることを報告している。これらのことから、ASD児の発達初期においては、コミュニケーションの基盤となる共同注意を成立させるための養育者への支援が後の子どもの発達にとっても重要であるといえる。しかしながら、ASD児の養育者に対する支援経過と共同注意の成立についての縦断研究は少なく、成立過程について詳細に検討する必要がある。そのため、本研究では、発達初期 (2歳) のASD児の共同注意を支える養育者の関わり方の変化について検討することを目的とする。

共同注意行動としては、指さし注視、指さし、交互注視、showing

（提示行為）、giving（手渡し行為）等があげられる（Tomasello, 1995）。しかしながら、指さし注視以外は、子どもが始発する共同注意行動であり、発達初期のASD児においては、これらの行為の出現は困難であることが多い（Mundy, 1986）。Adamson（1999）は、以下のような共同注意の発達段階を示している。第一期：注意深さの共有（shared attentiveness）の時期（誕生時～2ヶ月頃）、第二期：対人的関わり（interpersonal engagement）の時期（生後2ヶ月頃～生後5～6ヶ月頃）、第三期：対象物への共同関与（joint object involvement）の時期（生後6ヶ月頃～2年目の中頃。これ以降も継続される場合もある）、第四期：象徴的なコミュニケーションの出現（emergency of symbolic communication）の時期（一般的には生後13ヶ月以降）。ASD児の共同注意をとらえる際には、子どもが始発する共同注意行動ではなく、Adamsonが提唱するように、共同注意行動を対象物への共同関与も含めて広義で捉えるほうが臨床的応用はしやすいと考えられる。ASD児は、子どもが主導する共同注意行動は困難であっても、玩具の操作は可能であり、Adamsonが提唱する中でも特に、対象物への共同関与を1つの手がかりとして分析することができる。対象物への共同関与とは、「乳児は対象物について他者とコミュニケーションし始める／参加者は対象物への注意を共有できる」ということである。本研究での共同注意は、必ずしもアイコンタクトや、先述した、子どもが主導する共同注意行動が生起していなくても、対象物を子どもと大人が注視している状態を共同注意と規定する。

## 2. 方法

### 1) 対象

A児とその母親。A児は男児。自閉症。支援開始時の生活年齢は

2 : 4。新版K式発達検査によるDAは1 : 4。CAP（長崎・小野里, 1996）によるコミュニケーション評価では要求伝達系（自分自身の実用的な要求の伝達が目的）、音声言語理解、表出がそれぞれ7ヶ月相当、相互伝達系（他者と関わることで自分が目的）が4ヶ月相当。母親や大人が接近すると回避することが目立った。多動性、注意の転導性が高く、着席維持は困難であった。要求手段はぐずりとクレーンであった。アイコンタクトはほとんどなく、快情動（笑い）は、身体遊び以外ではほとんど観察されなかった。理解できることばは、状況の手がかりがあれば、「ナイナイ」（片付ける）であった。ジャーゴン様の発声を文脈に関係なく、特に機嫌の良いときに発していた。5～6ピースの幾何学パズルの操作はできるが、基本的な遊びは、部屋を走り回る、ミニカーを走らせる、物を並べることであった。見通しがたたないことについての不安は強く、また、青い物を片手にもって過ごすことが多かった。

本児の家族構成は、父、母、本人、妹。母親は、障害についての認識は本や医師からの情報により、ある程度持っており、自分の子どもは「かなり発達が遅れている」と捉えていた。2歳5ヶ月で障害の告知を受け、「ショックであったが遅れの原因がはっきりしたことですっきりしたと感じている部分もある」と語っていた。母親の子どもに対しての接し方については、子どもにとって嫌悪となる関わりは比較的少なかった。しかしながら、A児の注意を引こうとして玩具を提示したり呼びかけたりするものの、回避されてしまうことが多く、共同注意を成立させるための関わりは困難であった。母親自身も「子どもと関われない」と訴えていた。両親のニーズは発達促進と具体的な関わり方を知ることであり、「○○ちゃんと呼びかけて、子どもが自分を振り返り、かけてくるのが夢だ」と語っていた。両親の子どもに対する見方、発達の捉え方は、過大評価、過小評価いずれでもなく、基本的に支援者とほぼ同様で

あった。父親は育児に協力的であり、母親の相談相手になっているようであった。父方の祖父が徒歩10分程度にあり、子どもをみてもらうことも頻繁にあった。

発達支援についてのニーズは高く、2歳3ヶ月からB大学に來所し、月2回の発達支援プログラムに参加していた。

## 2) アセスメントと支援目標

本児における人との関われなさは、自閉症特有の問題が基盤となっているが、そこから派生する経験の不足も影響していると考えられた。要求手段の獲得、相互伝達系の促進を中心に、発達全般を促すと共に、家庭での具体的な関わり方を提示していくことが優先目標と考えられた。家族の状況から、ホームプログラム実施可能と判断。両親の精神的サポートを行いながら、具体的な関わり方を提示していくこととした。

## 3) 支援

今回、分析とする支援期間は2；4から3；10。支援内容は、月2回、個別指導（言語、認知課題）20～30分、小集団指導（言語・コミュニケーション課題が主）20分、面接30分とホームプログラムの提示であった。ホームプログラムは、家庭において、1日10分～20分程度、子どもの発達や興味に合った内容に基づいて親子が関わる機会を作ることを目的とし、コミュニケーションや認知面を中心とした課題を提示した。具体的には、簡単な手伝いや遊びなど、生活文脈を使いながら、共同注意成立に関わる方略を用いることとした。方略としては、子どもの現在の活動に必要な対象物を提示することにより、活動を持続させるよう、説明を行った。

母親は、指導場面を全て観察し、支援者の関わり方をモデルとするよう機会を作った。ホームプログラム提示の際には、意義を説明し、理解と同意を得ると共に、実際の遊び方や関わり方について指導者がモデル

提示を行うと共に、できるだけその場で母親にシミュレーションを行ってもらった。ホームプログラムの経過は、所定の記録用紙に記録してもらい、次回指導日に持参してもらった。面接では、関わり方や日常生活の問題や不安についての相談に応じると共に、ホームプログラムの経過について確認を行った。3～4ヶ月に一度、家庭訪問による環境学的調査を実施した。

#### 4) 観察場面

子どもの年齢が2；4、3；10において観察した母子の玩具遊び場面(15分間)を用いた。材料は、以下の通りである。コップ2個、皿2枚、茶碗2つ、スプーン2つ、フォーク2つ、箸2膳(4本)、哺乳瓶1つ、ガラガラ1つ、車1つ、トラック1つ、りかちゃん人形1体、キューピー人形1体、丸い鏡1つ、くし1つ、ブラシ1つ、布団セット(敷布団、掛け布団、枕)1つ、30cm平方のハンカチーフ1枚、2cm立方の木ブロック8個、円柱の木(直径1cm、長さ5cm)4本、軟膏ケース(直径4cm、長さ2.5cmの円柱形)。

玩具遊び実施時においては、母親に対し、「普段遊んでいるように、お子さんと遊んでください」と説明を行った。

#### 5) 分析

VTRを再生し、分析対象15分間をプロトコル化した。

##### (1) 母親が子どもに関わるタイミング

Landry(1996)、中野ら(2005)の分析カテゴリーを参考に、子どもに関わる母親の行動のタイミングを、子どものその時の注意対象を基準として、「維持」、「導入」、「再方向化」の観点で分析した(Table 1)。母親が子どもに働きかけるタイミングについて、それぞれ生起頻度をカウントし、割合を算出した。

##### (2) 子どもの反応

Table 1 母親が子どもに働きかけるタイミング

カテゴリー	定 義
注意の維持	子どもが注視、あるいは操作している玩具に大人が働きかける。子どもが注視、操作している玩具を大人が扱う。 例) 子どもが遊んでいる際、遊びの継続に必要な玩具を提示する：(子ども：コップから飲む →母親：コップに水を注ぐふりをする)
注意の導入	子どもがどの玩具も注視、あるいは操作していないとき、大人が玩具に注意を向けるように働きかける。(例、玩具を提示する等) 例) 子ども：母の指を引っ張り、席を立ち、歩き出す →母親：「あっ、お皿」「A君どうぞ」と言って皿を渡す
再方向化	子どもが注意を向けているのとは異なる玩具に大人が注意を向けさせようとする。 例) 子ども：スプーンを持っている →母親：車を提示する
その他	上記のいずれにも分類できないもの

（1）に基づき、子どもの注意を継続させた働きかけ、すなわち効果をもった働きかけ方について検討を行った。Landry（1996）に基づき、母親の働きかけ直後、子どもが母親の提示に応じた（人・物への注視、物を受け取る）頻度を算出した。物を受け取ったとは、ここでは、子どもが玩具を受け取った後、5秒以上保持していた場合とした。次に、子どもが働きかけに応じたのは、母親の（1）の方略のいずれであったかを分析するために、「維持」、「導入」、「再方向化」に分類し、割合を算出した。

### （3）家庭での変化

セッションごとに、家庭でのコミュニケーションの様子を中心とした逸話を聴取し、記録した。

### （4）信頼性

各カテゴリーについて、2名による一致率（一致数／一致数+不一致数×100）を算出したところ、91.2%の一致率が得られた。

### 3 結果

Fig.1に、母親における関わり方のタイミングを示した。2；4には「注意の導入」による遊びの開始が最も多く、45.1%であり、次いで「注意の維持」の28.2%、「再方向化」の23.4%と続いた。3；10になると、「注意の維持」の割合が48.2%と増加、「注意の導入」の45.1%とほぼ同率になり、「再方向化」の割合が減少した。

次に、母親が関わるタイミング別にみた、子どもが働きかけに応じた頻度をFig.2に示した。2；4は3；10に比べ、子どもが働きかけに応じた頻度が総計9と少なく、3；10では19と、2倍近くになった。2；4では「注意の導入」後が5、「注意の維持」後が4とほぼ同数であったが、3；10には、「注意の維持」後に12、「注意の導入」後に7となった。

家庭での様子では、2歳5ヶ月頃から、本児が遊んでいる際に大人が接近しても、回避することが軽減した。玩具遊びにおいて、他者の操作を模倣することや、他者の指した先を注視する指さしの理解が可能になった。他にも、3；10にはリーチングによる要求が可能になり、ターンの中断が多いものの、ボールのやりとりを2、3回続けることが可能になった。理解言語は8、表出言語は3であった。ホームプログラムとして提示していたお手伝い（「トレーに食器を入れる」、「父親のコップにビールを注ぐ」、「タオルをたたむ」等）についても、できることが増え、母親は、「（うちの子は）こんなこともできるようになったのだなあと思った」と語っていた。また、母親は、3；10の時期に、「子どもと遊べるようになって嬉しい」という感想を語っていた。

2歳自閉症スペクトラム児の母親における共同注意成立に関わる働きかけの変化（1）

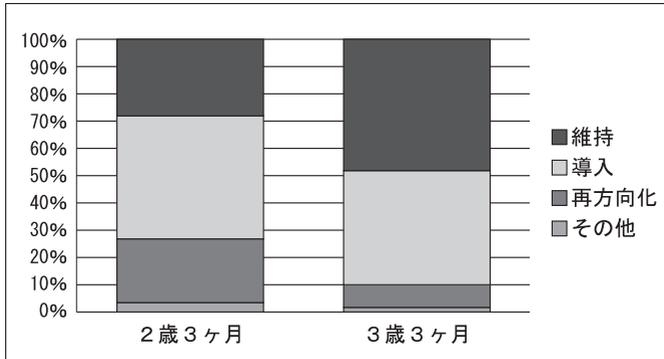


Fig.1 母親が働きかけるタイミング

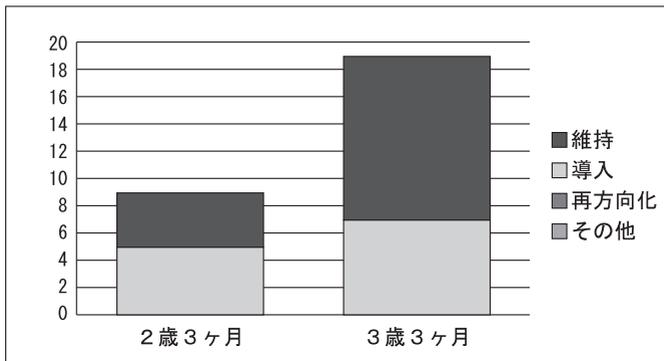


Fig.2 子どもが働きかけに応じた母親の方略

#### 4 考察

母親が働きかけるタイミングとしては、子どもの月齢が2；4においては「注意の導入」が最も多かったが、3；10では「注意の維持」の割合が増加した。3；10において、子どもが母親の働きかけに応じた頻度が最も高かったのは、同じく「注意の維持」であった。

母親の働きかけのタイミングのうち、「注意の維持」とは、共同注

意の成立を最も容易にさせる方略であり（Landryら，1996：中野ら，2005）、大人による共同注意の「足場作り」の役割を果たす。

中野ら（2005）は、典型発達児の母親における共同注意成立のための方略は、子どもの発達に伴って変化していることを示している。具体的には、①子どもの関心に合わせる（7～9ヶ月）、②新しい玩具に注意を向けさせることにより、子どもの関心を広げる、③子どもの自発性が増すと、それに合わせてさらに関心を広げる（12-14）といった順序性が見出されると指摘している。本研究の母親の働きかけについては、中野らの指摘とは異なり、対象児の発達に伴い、「注意の導入」（新しい玩具に注意を向けさせようとする）から、「注意の維持」へとシフトしたといえる。この要因としては、以下の3つが考えられる。

1つめは、子ども側の発達の变化である。3；10には子どもの伝達手段（リーチングの獲得等）や遊びの質が変化しており、共同注意の成立が、2；4に比べて容易であったと考えられる。中野ら（2005）は、ASD児では2、3歳の初期には玩具への注意持続時間が短く、ASD児が自発的に玩具に関心を向けないことが多いため、母親が何とか新しい玩具へ子どもの注意を向けさせようとする働きかけが多くなると指摘している。本研究の対象児においても、2；4において、母親の働きかけに応じた頻度は3；10に比べて非常に少なく、中野らの指摘と同様、母親は、対象物を手がかりとして対象児の注意を共有しようとしていたため、2；4においては「注意の導入」の割合が高かったと考えられる。

つまり、神園（2002）、中野ら（2005）、常田（2007）らの先行研究と同様、典型発達児、ASD児共に、母親の行動は、子ども側の変化に影響を受けていることが改めて示唆されたといえる。

以下に、2；4と3；10におけるプロトコルの一部を示す。2；4においては、以下のような相互交渉が目立った。

①2；4 導入場面

母 親：玩具の入った袋を見せる。

子ども：その場を離れ、歩き出す。

母 親：「○○ちゃん、あっ、お皿」

子ども：（少しして）母親に接近するが、お皿は注視しない。

母 親：「あっ、お皿」「○○くん、どうぞ」と皿を渡す。

子ども：受け取るが、すぐに（2秒以内に）落とす。

立って走り回る。

②3；10

母 親：「ジャーン」哺乳瓶を見せる。

子ども：哺乳瓶を見る。

母 親：「ほら、欲しいでしょ（ほほ笑み）」子どもに哺乳瓶を手渡そうと手を伸ばす。

子ども：哺乳瓶を受け取り、口にくわえる。

母 親：「赤ちゃん、赤ちゃん」と言い、キューピーを差し出す。

子ども：キューピーの口に哺乳瓶をもっていき、母親を見る。

子ども：哺乳瓶を持ったままその場を離れる。

2；4においては、母親が玩具を提示した後、子どもが受け取ったとしても、すぐに手放すなど、活動が維持できないことが多かった。それに対し、3；10になると、母親が提示した玩具を受け取った後に機能的な物の操作を行い、活動を維持することや、あるいは、行為後に母親を注視するという子ども主導の共同注意の成立が認められる。3；10時点での子どものこのような行為は、スムーズな相互交渉を成立させやすいと考えられる。

2つめは、母親による指導場面の観察、ホームプログラムを通した子どもへの関わり方に関する助言が効果的であった可能性である。

例として、玩具遊びの導入場面をみとめることとする。2：4の導入場面は、先に示した場面であるため、ここでは3：10のみ示す。

### 3：10 導入場面

母 親：「○○ちゃん」（4回）玩具の音を出しながら玩具を広げる。

子ども：その場を離れ、歩き出す。

母 親：「○○ちゃん」 子どものところに行く。玩具のある場所を指さし、体に手を添えながら玩具のある場所へ誘導する。

両月齢共に、冒頭、母親が働きかけても、子どもがその場を離れてしまうという行為が続くところは共通している。しかし、2：4では母親はその場に座ったままの状態、子どもに呼びかけているが、3：10では、母親が移動し、ことば以外の手段で子どもを玩具遊び場面に誘導している。玩具のある場所を「指さす」という方略は、共同注意を成立しやすい行為である。別の視点でみると、子どもの発達的变化に伴い、母親の働きかけ方略においてはむしろ子どもに提示する手がかりが増えていくといえる。このことは、母親が、子どもの注意を引きつける方法について理解し、子どもの認知的環境に対する感受性が高くなった表われであると考えられる。つまり、母親が、子どもの行動パターンを理解し、子どもの行動に合わせて働きかける方略を変化させたと考えられる。背景としては、指導効果のみならず、1つめに述べた子どもの発達的变化も大きな要因と考えられ、両者の関係については今後の課題である。一方、母親は、自身の内省として、本児と関わりやすくなったことや、子どもの発達を実感していることを語っている。毎日の関わり

を通したこのような母親の心理的变化も、実際の相互交渉における行為の変化として表れている可能性はある。

3つめは、子どもの移動能力の問題である。対象児は、注意の転導姓、多動性が比較的顕著であり、対象物を受け取ってもすぐに落とすか、あるいは玩具に従事せず、走り回る（下線部）ことも多かった。典形発達児の場合、中野ら（2005）の研究でも指摘されているように、母親が子どもの注意を維持しようとする働きかけが盛んに行われるのは、子どもが歩行開始前の時期であった。常田（2007）は、2～9ヶ月の乳児と母親を対象とした縦断的研究から、子どもと養育者の間に成立する共同注視の質が、子どもの姿勢制御能力、すなわち身体的発達の制約を受けることを指摘している。対象児は、既に歩行が確立しているにも関わらず、共同注意は成立しづらい状態にあった。歩行が確立していることは、ASD児の自由な移動や玩具への回避行動を容易にさせ、そのことが大人との共同注意をさらに成立しにくくさせているといえる。加えて、本研究の対象児のように、注意の転導姓、多動性を伴う場合は、より一層、共同注意成立のために、大人側が細心の注意を払う必要があるといえる。Clearfield（2011）は、9～12ヶ月児と母親を対象とした観察を通して、歩行の獲得と社会的相互作用との関係について報告している。それによると、歩行獲得前後において、相互作用の質が異なり、歩行獲得後は、幼児が主導する共同注意の増加が認められるとしている。このように、典形発達児では、歩行獲得は、共同注意の高次化においてプラスの役割を果たすが、運動発達とコミュニケーション発達の領域間のアンバランスさが顕著である多くのASD児においては、歩行獲得がむしろ共同注意を成立しにくくさせるという結果をもたらす可能性がある。つまり、歩行と共同注意の関係において、ASD児は典型発達児とは異なる様相を示すと言える。共同注意行動は、前述したように、後の様々な

行動に影響を及ぼす。典型発達児と異なる共同注意プロセスを踏まえ、ASD児の発達支援においては、かなり早期から養育者の共同注意方略を優先的に支援する必要性を示唆するものである（小野里，2010）。実際、Prizantら（2005）が開発した、ASD児のための包括的発達支援プログラム（SCERTS）では、子どもの共同注意行動の綿密な評価と支援と同時に、「交流型支援」という枠組みで、養育者の共同注意方略への支援を位置づけている。

今後は、プロトコルの詳細な分析を通して、ASD児の共同注意を成立させる方略に関する微視的分析、3歳以降の様相についての追跡調査及び、複数事例についての検討が必要である。

## 文献

- Adamson, R, B (1999) 大藪秦・田中みどり訳 (1999) 乳児のコミュニケーション発達：ことばが獲得されるまで. 川島書店
- Clearfield, M. W. (2011) Learning to walk changes infants' social interactions. *Infant Behavior and Development*, 34, 15-25.
- 遠藤利彦 (2010) 情動・感情の発達と支援の課題 コミュニケーションの発達とスクリプト研究会（自閉症児者に対するスクリプトによる社会性の生涯発達支援～身体の動きと情動の共有、そして豊かな感情へ～）資料.
- 廣澤満之・田中真理 (2008) 非慣用的言語行動を多用する自閉性障害児に対するかかわり手の発語の分析：かかわり手による非慣用的言語行動の理解変容過程との関係. *特殊教育学研究*, 45, 243-254.
- 本多啓 (2006) 認知意味論、コミュニケーション、共同注意：捉え方（理解）の意味論から見せ方（提示）の意味論へ. *語用論研究*,

8-13.

- 神園幸郎（2002）自閉症児のコミュニケーション指導に関する研究：研究1：自閉症児の発達に及ぼす母親の意識改革の影響．琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要，1，1-16.
- Landry, S. H, Garner, P. W., Swank, P. R., & Baldwin, C. D. (1996) Effects of maternal scaffolding during joint toy play with preterm and full-term infants. *Merrill-Palmer Quarterly: Journal of Developmental Psychology*, 42, 2, Apr, 177-199.
- Mundy, P., Marian Sigman, M., Ungerer, J., & Sherman, T. (1986) Defining the social deficits of autism: the contribution of non-verbal communication measures. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 27, 657-669.
- 中野美紀・小野里美帆・長崎勤（2005）自閉症児・健常児の母親はどのようにして注意共有を促すのか？：2・3歳～5歳の自閉症児と7～14ヶ月の健常乳幼児の比較を通して 日本発達心理学会第16回大会発表論文集，429.
- 長崎勤・小野里美帆（1996）コミュニケーションの発達と指導プログラム：発達に遅れをもつ乳幼児のために．日本文化科学社.
- 大神英裕（2002）共同注意行動の発達の起源．九州大学心理学研究，3，29-39.
- 小野里美帆（2010）「SCERTSモデル」による自閉症児へのコミュニケーション・情動調整の発達支援—家庭・園との連携を通して—．日本特殊教育学会第48回大会自主シンポジウム指定討論資料.
- Prizant, B. M., Wetherby, A. M., Rubin, E., Laurent, A. C., & Rydell, P. J. (2005) The SCERTS Model: A Comprehensive educational approach for children with autism spectrum disorder. *Brookes*

- Publishing Company. 長崎勤・吉田仰希・仲野真史訳 (2010) SCERTSモデル：自閉症スペクトラム障害の子どもたちのための包括的教育アプローチ 1巻. 日本文化科学社.
- Siller, M., & Sigman, M. (2002) The Behaviors of Parents of Children with Autism Predict the Subsequent Development of Their Children's Communication. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 32, 77-89.
- 常田美穂 (2007) 乳児期の共同注意の発達における母親の支持的行動の役割. *発達心理学研究*, 18, 97-108.
- Tomasello, M. (1995) Joint attention as social cognition. Moore, C., & Dunham, P. J. (1995) Joint attention: Its origins and role in development, 大神英裕訳 (1998) ジョイントアテンション：心の起源とその発達を探る. ナカニシヤ, pp.93-118